

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「アジア地理言語学研究」平成 28 年度第 1 回研究会

日時：平成 28 年 11 月 19 日（土）13:00-18:00, 11 月 20 日（日）9:00-16:00

場所：AA 研マルチメディア会議室(304)

今回は予算の関係上「風」と「鉄」の 2 語を 1 回の研究会で検討した。以下は各発表者自身による要約である(発表順)。

Tokusu KUREBITO (ILCAA), ““Wind” in Paleo-Asiatic” , ““Iron” in Paleo-Asiatic” 要旨未着

Yoshio SAITO (Tokyo Gakugei University) , ““Wind” in Mongolic and Turkic”

モンゴル系諸言語では、分布地域の東、南、西の周辺部に kei 系の語、それ以外の地域に salyan, salix, halxin など salkin 系の語が分布している。後者の地域では kei 系の語は「風」ではなく「空気、ガス」の意で用いられている。分布から、モンゴル系の言語では kei 系の語が古いと解釈でき、文献資料とも矛盾しない。

テュルク系諸言語では、分布地域の周辺部には、東に tial 系、salkin 系、xat 系、南に ruzgar 系（ペルシャ語起源）、šamal 系（アラビア語起源）、külök 系と地域ごとにさまざまな形式が見られる。中心部を含む広い地域には jel 系の語が分布している。

Mika FUKAZAWA (ILCAA Joint Researcher, Chiba University), ““Wind” in Ainu”

アイヌ語の「風」を表す語形は一様分布であり、音韻的な違いのみが観察されるということを紹介した。北海道方言では rera となり、樺太方言では reera となる。また、樺太の内路方言では語頭の /r/ が概して /t/ として現れ、teera となっている。「(風が) 吹く」という表現には幾分方言差が目立ち「立つ」「ある」「強い」などという意味の語彙が使用される。一方、「(風が) 止む」という表現には「切れる」や「ない」という意味の語彙が使用される。アイヌ文化のなかには、強風を止めるまじないに鎌の刃を向けるというのがあり、「切れる」という語彙との関連が見込まれる。

Rei FUKUI (The University of Tokyo), ““Wind” in Korean”

Modern Korean word for “wind” is /param/. It shows very little dialectal variation. The corresponding Middle Korean word was /palam/, and the modern form is irregular because the MK vowel /a/ generally realizes as /i/ in the second syllable. There have been several theories on the etymology of this word, but none of them is satisfactory.

Kenji YAGI (ILCAA Joint Researcher), ““Wind” in Sinitic”

中国語において風を示す語は全て共通の祖形 MC: pjuŋ (Schussler 2007) に遡ると見なされる。全て一音節で一様分布を示すが、語頭子音の状況から、最も古い形式を保存し福建や湖南に分布する p タイプ、軽唇音化を経た形式で、全国に分布する f タイプ、南方に分布し

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

喉音系の語頭子音と合流する *h* タイプの三種類に分類できる。主母音は南方では円唇となる場合が多い。また、湖南周辺などでは語末子音-ŋ の弱化を反映した形式が見られる。

Mitsuaki ENDO (ILCAA Joint Researcher, Aoyama Gakuin University), ““Wind” in Tai-Kadai”

タイカダイ語の「風」と周辺諸言語の語形との関係については Endo, Mitsuaki. 2014. The Words for "Wind" in the Eastern Asian Languages. *Keizai Kenkyu*, 6: 117-129. で論じたことがあった。今回は語形の分類をより精確に行い、A. lom 類, B. vo:t 類, C. viu 類に大別した。B・C 類は海南島の黎語のみに見られる。大陸部のタイカダイ語はすべて A 類となるが、音節頭子音に多くの変種が見られる。それを含む音類については Endo, Mitsuaki. 2016. Geographical Distribution of the /r/ type sounds in Zhuang, *Papers from the Third International Conference on Asian Geolinguistics (Studies in Asian Geolinguistics, Monograph Series No. 1)*, 46-71. で詳しい比較言語学的・地理言語学的検討を行っており、A-2 r-m 類が最古の形で、A-8 hj-m 類はそこから変化した；A-7 y-m 類は最も新しいタイプである；他は A-4 z-ng 類の末子音は A-3 z-m 類から変化した他は、A-1 l-m 類・A-5 j-m 類・A-6 ð-m 類・A-7 y-m 類はそれぞれの地域で個別に変化したものと結論づけた。

Atsuko UTSUMI (Meisei University), ““Wind” in Austronesian” , ““Rice” in Austronesian” 要旨未着

Yoshihisa TAGUCHI (Chiba University), “Iron”: overview

鉄は、人類が道具製造の原料とする金属の中で、歴史上最も汎用性の高い金属といえる。人類が使用するのは純鉄ではなく、炭素をはじめとする他の金属との合金である。人類が最初に使用した鉄は隕鉄であるが、地球上に産する自然鉄を加工して得られる鉄合金を使用して初めて道具を作成したのは、紀元前 1800 年ごろのアナトリア及び北部インドと考えられている。製鉄技術は、アジア方面へは中央アジアを経て中国へ伝わっていく。「鉄」を表す語彙は、文化語彙であり、現在中央アジアに分布するモンゴル語系とチュルク語系では、同一語源に遡るとみられる語の伝播がみられる。一方、東アジアでは、中国語由来の語形が広くみられる一方で、タイ・カダイ語系諸語、チベット語系諸語には、これとは異なった語形もみられる。島嶼部東南アジア、インド、アラビアでは、それぞれいくつかの語形が確認される。

Yoshio SAITO (Tokyo Gakugei University), ““Iron” in Mongolic and Turkic”

モンゴル系・チュルク系を通じて、モンゴル系諸言語分布地域東部のダグール語の *kasō* 以外はすべて *temir* タイプの語である。（チュルク民族は古代から高い製鉄技術を持っていたことで知られ、*temir* はチュルク語起源と考えられる。ダグール語の単語の起源は不詳である。）

なお、チュルク系諸言語では分布地域の南側の周辺部のいくつかの言語で語頭の *t* が *d* となっているものが見られる。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

Mika FUKAZAWA (ILCAA Joint Researcher, Chiba University), ““Iron” in Ainu”

アイヌ語の「鉄」を表す語形には、日本語の「金（かね）」の借用語で「金属」と同形になる A タイプ、それに「ふつうの」や「本当の」「岩の」という修飾語をつけた B タイプ、さらに日本語の「鉄」をそのまま借用した C タイプが観察された。北海道がオホーツク文化と擦文文化の二つに分かれていた 9～10 世紀頃から鉄の加工は行われていたが、鉄そのものは東北地方や大陸から手に入れていたようである。なお、日本語の東北方言で「金」が尾高アクセントであるのに対し、多くのアイヌ語の方言では例外的に第一音節にアクセント核が来ており、その理由について考察の余地を残している。

Rei FUKUI (The University of Tokyo), ““Iron” in Korean”

The most common word for “iron” is /sø/ or /swe/. This word goes back to Middle Korean /soy/. It was synonymous with the word for “key” and it can be argued that both are the results of borrowing from Chinese „鎖” (this was pointed out by Keita Kurabe at the meeting). Modern Sino-Korean reading for this character is /swe/ and MK /swa/, showing a slight difference with the case of the modern word for “iron”. However, some of modern dialects, especially Phõng’an dialects, have the form /swe/ which is identical with the Sino-Korean reading of the character „鎖”.

Fumiki SUZUKI (Kyoto University), ““Iron” in Sinitic”

中国語方言において鉄を表す語は基本的に「鉄」の一様分布である。音韻差はみられるが、いずれも *ʃik (上古漢語) > *thet (中古漢語) に対応する規則的変化による。西南官話地区の数地点で併用される「鉄巴」は、鉄塊を表す語が一般化したものと考えられる。

Kazue IWASA (JSPS/Kyoto University, in absentia) read by Keita KURABE (ILCAA Joint Researcher), ““Wind” in Tibeto-Burman”

560 の言語・方言データに基づいて分類を行った結果、24 の語根が確認されたが、その大半は、チベット・ビルマ祖語 (PTB ; STEDT 参照)、クキ・チン祖語 (PKC ; STEDT 参照)、チベット文語 (WrT) の語形に対応するものである。中でもとりわけ興味深いのは、PTB *g-ləy で、これは現代語において L1, K, KL の 3 タイプに分化したと考えられる。L1 及び K タイプでは、初頭子音結合の *g-l はそれぞれ l- 或いは k- に代表されるような子音類へと変化した一方、KL タイプにおいては、mBola Situ rGyalrong の [kʰə22 li44] のように、*g-l が 2 音節に変化したと推察される。

Keita KURABE (ILCAA Joint Researcher), ““Iron” in Tibeto-Burman”

チベット・ビルマ系言語の「鉄」の大部分は 3 つのグループに分類できる。そのうち、特に語群を超えて広く分布するのは、チベット・ビルマ祖語の *syam 「鉄」に由来する Type

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

A と祖語の **sya:l* ⇔ **syi:r* に由来する Type B である。これらは、順行・逆行同化、そり舌化、非口腔音化、末子音の脱落などの音変化による様々な反映形を持つ。地理的に Type A はビルマ全土、雲南、四川、貴州、タイ北部に、Type B はビルマ西部、インド北東部、ネパール東部に集中して分布する。加えて、祖語の **l-tsyak* 「鉄」に遡る Type C があり、これは特にチベット語方言とカレン語群に分布する。

Yoshihisa TAGUCHI (Chiba University), ““Wind” in Hmong-Mien”

ミャオ・ヤオ語族における「風」を表す語は、二つの語源形にまとめられる。そのうちのひとつはミャオ・ヤオ祖語のレベルで **N-caewH* と再建されるが (Ratliff 2010)、ミャオ語系とミエン語系は音節頭子音の対応に不規則性がある。もう一つの形式である *poŋ5* は、ミャオ語系の幾つかの地点語にのみ見られる形式で、この形式は、他のミャオ語系諸言語では「空気、匂い」という意味で用いられる。*poŋ5* を「風」という意味に用いる言語では、この語の意味拡張が起こった可能性がある。

Yoshihisa TAGUCHI (Chiba University), ““Iron” in Hmong-Mien”

ミャオ・ヤオ語族における「鉄」を表す語は、すべて漢語からの借用語であり、ミャオ・ヤオ祖語に遡る可能性がある。先行研究では、ミャオ語系祖語に遡る語形と、ミエン語祖語に遡る語形の二つを別々に建てているが、これらはひとつに遡る可能性を示した。一方、「鋼」については、ミャオ語系の幾つかの言語に、漢語の借用語とは思われない 4 タイプの語形があり、比較言語学的には不規則であるが類似した形式を示す。

Mitsuaki ENDO (ILCAA Joint Researcher, Aoyama Gakuin University), ““Iron” in Tai-Kadai”

タイカダイ語の「鉄」は A. *lek* 類・B. *khət* 類・C. *thi:t* 類・D. *va* 類・E. *go:i* 類・F. *maa* 類の 6 つに大別される。李方桂(1977)によるタイ祖語形は **hle:k* D で、A 類はそれを保持し、また中国語上古音の形とよく一致することが既にたびたび指摘されている。これが西南タイ語地域に分布し、中国語から最も離れた場所に最古の形が保存されていることとなる。B 類も実際には上古漢語の **hlik* に遡ると見られるが、頭子音が *kh-* に変化したもので、水語などのカダイ語に見られる。C 類は *hl->th-*, *-ik->-it* という規則変化を経た中古漢語形から借用されたものと見られ、チワン語など漢語と直接隣接する地域に見られる。チワン語の一部の方言では有気音が規則的に無気音化し、C-2 *ti:t* 類はその音韻変化を被った形である。D 類は漢語の形とは類似せず、北タイ語の北部、ポアイ語やチワン語北部方言に見られる。E 類も漢語由来とは全く違う語形で海南島の黎語に見られる。F 類は古風な特色を保存することで知られるセーク語に見られるが、清水正明氏によるとオースロアジアの *Bahnaric* に類似する語があり、そちらからの借用かもしれない。他の言語との関係で言うと、清水正明氏の今回の「鉄」の発表で扱われたベトナム語の *k-rac* 型がカダイ語の B 類と近いことは注目される。カダイ語は貴州省にあつて、ベトナム語と直接接するわけではないので、両者の関係が特別視されることは管見には入っていない。他にベトナムとカダイの間に平行例がないか今後注意してよい。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

Masaaki SHIMIZU (ILCAA Joint Researcher, Osaka University), ““Iron” in Austroasiatic”

Austroasiatic 諸言語の「鉄」を表す形式は以下の 14 のグループにまとめることができる。A. *bəsi?* タイプ (Aslian)、B. *ma:m* タイプ (Bahnaric)、C. *lɔ:s* タイプ (Bahnaric)、D. *ta:?* タイプ (Katuic, Bahnaric, Khmeric, Pearic)、E. *tami:* タイプ (Bahnaric)、F. *nar* タイプ (Khasic)、G. *bərsɔy* タイプ (Monic, Bahnaric)、H. *karaw* タイプ (Nicobaric)、I. *hle:k* タイプ (Khmuic, Palaungic)、J. *rɲaŋ* タイプ (Palaungic)、K. *hrəm* タイプ (Palaungic)、L. *si(i)r* タイプ (Bahnaric, Palaungic)、M. *kahɔ:ŋ* タイプ (Pearic)、N. *k-rac* タイプ (Vietic)。そのうち B. *ma:m* タイプ、I. *hle:k* タイプ、N. *k-rec* タイプの 3 形式は Tai-Kadai に共通する形式が見られ、L. *si(i)r* タイプは Tibeto-Burman、そして E. *tami:* タイプは Mongolic, Turkic に共通する形式を見出すことができる。例えば、D. *ta:?* タイプと N. *k-rac* タイプは ABA 分布を示すので *ta:?* タイプの方が古い、等の点を指摘することができる。

Youichi NAGATO (ILCAA Joint Researcher, Tokyo University of Foreign Studies), ““Wind” in Semitic”

ヘブライ語 *ru:ah* やアラム語 *ru:ha:*、マンダ語 *rehwa* など北西セム諸語では語根 *r-w-h* の語が多いが、これは「靈魂」も表す。アラビア語で *ru:h* は「靈魂」で、「風」は *ri:h* となり、語形が分化している。エジプトやシリア周辺のアラビア語では、元来「空気」であった *hawa* が「風」として使われている。また、ヘブライ語 *nefeš* 「心」、アラビア語 *nafəs* 「魂」、*nafas* 「息」と共通語根の語形がアムハラ語 *nāfas*、ティグリニヤ語 *əmfas* などエチオピア諸語で使われている。

Youichi NAGATO (ILCAA Joint Researcher, Tokyo University of Foreign Studies), ““Iron” in Semitic”

おそらくアナトリアのヒッタイト語などから借用されたアッカド語の *parzillu* 「鉄」が、北西セム諸語のウガリト語 *b-r-ḏ-l*、フェニキア語 *b-r-z-l* などを経てヘブライ語 *barzel* 「鉄」となっている。ベルベル諸語の *wəz:āl* (ガダメス語) などが、この語形に似ているが、カルタゴを経て借用されたかも知れない。アラビア語はこれらと関連はなく、*ha:dd* 「鋭い」と語根を共有する *hadi:d* を用いる。モロッコからウズベキスタンまでアラビア語で用いられているため、イスラム征服の以前からの語形である。

Rei FUKUI (The University of Tokyo), Exhibition of Seal version 8.0

Seal is a system for drawing linguistic maps originally developed by Chitsuko Fukushima and Yusuke Fukushima. This new version of Seal is an adaptation of the original Seal and provides a much easier user interface and various enhanced functions such as options and commands for encoding, printing, line drawing methods for maps, and so on. It also offers a systematic way of assigning symbols used to represent linguistic forms.

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

最後に代表者にとって特に印象に残っているのは、まず深澤美香氏が発表されたアイヌ語において「鉄」が近年の日本語からの借用語と見られるのに、アイヌ語固有語の祖語からの音韻対応に沿った *káni* (北海道方言) : *kaani* (樺太方言) のような規則的な対応をなしていることであった。日本語の「金かね」は長母音であった徴候はないので、日本語と近接する北海道アイヌ語がまず第一音節にアクセントがある形で受け入れ、樺太方言がそこから更に音韻対応規則によって第一音節が長母音である形に換算しなおして受け入れたと見られるだろう。話者が方言間の音韻対応規則を無意識裡に知っていると思えない現象は中国語などでもよく接するところである。また倉部慶太氏の発表によるチベットビルマ語の D 類(道孚語に見える)が頭子音は C 類・母音は A 類から来たとする解釈も面白く、A 類はいろいろ母音があるところ、特に D 類に近いあたりでは *o* に近い母音になることも倉部氏は発表中で示された。単音節言語の場合、例えば中国語では多音節語では方言間接触によって音節を単位として接触しあう両方言の要素が組み合わさった語形になることはよく見られるようだが、一音節内で頭子音と母音がそれぞれ別方言に由来するという融合の例はこれまで知らなかった。

(遠藤光暁)